

【旧約聖書日課】民数記 11章24～29節

²⁴モーセは出て行って、主の言葉を民に告げた。彼は民の長老の中から七十人を集め、幕屋の周りに立たせた。²⁵主は雲のうちにあって降り、モーセに語られ、モーセに授けられている霊の一部を取って、七十人の長老にも授けられた。霊が彼らの上にとどまると、彼らは預言状態になったが、続くことはなかった。

²⁶宿営に残っていた人が二人あった。一人はエルダド、もう一人はメダドといい、長老の中に加えられていたが、まだ幕屋には出かけていなかった。霊が彼らの上にもとどまり、彼らは宿営で預言状態になった。²⁷一人の若者がモーセのもとに走って行き、エルダドとメダドが宿営で預言状態になっていると告げた。²⁸若いころからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアは、「わが主モーセよ、やめさせてください」と言った。²⁹モーセは彼に言った。「あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。」

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 12章14～26節

¹⁴体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。¹⁵足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁶耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁷もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。¹⁸そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。¹⁹すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。²⁰だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。²¹目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。²²それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。²³わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、²⁴見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。²⁵それで、体に分裂が起らず、各部分が互いに配慮し合っています。²⁶一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章33～41節

³³一行はカファルナウムに來た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。³⁴彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。³⁵イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」³⁶そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。³⁷「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」
³⁸ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追いつけている者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」³⁹イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。⁴⁰わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。⁴¹はつきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

いちばんになりたい？【こども説教のために】

主イエスの弟子たちは、人生で出会った人の中で主イエスが一番偉大な人だと思って、主イエスに従って来ていました。けれども、主イエスがいずれ自分たちの前から見えなくなれるときが来ると聞いて、不安になっていたのかもしれませんが。自分たちにとって一番偉大な方がいらっしやらなくなった後、自分たちはだれに従って行ったらよいのだろうか、と。十二人の弟子たちの中でも、だれが主イエスの偉大さを受け継ぐ者なのだろうか、と。

そのことを議論していた弟子たちに気づかれて、主イエスは、彼らに言われたのです、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」と。

「いちばん先」というのも難しいですが、「すべての人の後」とか「すべての人に仕える」というのも難しそうです。どれだけのことをすればよいのでしょうか。主イエスは、目の前の一人をご覧になられます。そこにいる「一人の子供」を真ん中に立たせて、「受け入れなさい」とおっしゃいます。弟子たちの仲間にならずに主イエスの名を用いて奇跡を行っている者のことを聞いて、「やめさせてはならない」、「わたしの味方だ」とおっしゃいました。

一番になりたいならば、見える中でいちばん遠くにいる一人を見つけて、真ん中に立たせ、抱き上げてみるのです。その一人の苦しみを共に苦しみ、その一人が周囲から尊ばれるならば一緒に喜ぶのです。主イエスは、そのようにしてわたしたちを共にいるようにしてくださったのです。

「弱く見える部分」

わたしたちの教会は、この七月、新しい命の誕生を祝うことから歩み始めましたが、また一つの地上の命が終わりのときを迎え主の御もとに取り上げられることを厳かな思いで受けとめるときとしても過ぎてまいりました。誕生と死は、わたしたちすべての者が人生の中でもっとも小さな存在として過ごすことになるとき、と言ってもよいでしょう。その傍らに、選ばれた助け手を必要とするとき、です。そして、その選ばれた助け手のことを近くで支える者をも必要とするとき、でもあるかもしれません。

「週報」や「月報」、また掲示板でもご報告しているとおり、先主日の午後、わたしたちの教会から伝道者として送り出した榊原かをる先生は、沖縄・読谷教会の主任担任教師就任式に臨まれました。沖縄教区には 24 の教会・伝道所がありますが、そのうち 16 の教会・伝道所から参列者があったということです。沖縄には本島だけでなく諸島の教会・伝道所もありますから、おそらく本島にある教会・伝道所のほとんどから参列されていたのでしょう。東京教区の教会で行われる就任式では考えられないことですが、地方教区では当たり前のことです。もっとも、日本基督教団には 17 の教区がありますが、沖縄教区のように教会・伝道所数の少ない教区は、他にありません。どの教区にもはるかに多くの教会・伝道所があり、教区の中に地区が置かれているのです。沖縄教区の教会・伝道所数は、多くの教区で地区に相当するものです。沖縄教区は、特別に小さな教区なのです。歴史的な経緯があつて、そうになりました。ある意味で特別扱いがされてきたのです。教団の中には、沖縄教区が小さいからと言って特別扱いするべきではない、と考える者もいます。そうかもしれません。けれども、全体の中で特別扱いが必要な小さな部分、弱く見える部分があるというのは、もしかするとキリスト教会にとって必要なことなのかもしれません。

使徒パウロは、「**体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです**」と言います。「**神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、身体を組み立てられ**」た。体全体は、ほかよりも**恰好が悪いと思われる部分を…恰好良くしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとするために働くのが当然だ**。そうすることで**体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うことになる**、と言うのです。

パウロは、この「体」のたとえを、教会のあり方を教えるために語っています。教会には、一見すると**ほかよりも弱く見える存在が含まれる**のです。いいえ、本当は、この世界には必ずそのような存在が含まれるのでしょう。そして、教会にも、それは含まれる。ただ、そのような存在をどう扱うのかという点が、この世界と教会とでは異なるのです。異なっていたのです。

すべての部分が共に

元来、人類は、何万年も前から自分たちの集団に属している仲間であれば、それがほかより弱く見える者であろうと、見劣りする者であろうと、あるいは役に立たない者であろうと、互いに支え、助け、守ってきた、と言われます。一人前になる前の子どもは守られ、怪我や病気で弱っている者、年老いた者らも簡単に見捨てられるようなことはありませんでした。ところが、時代が進み、人が自分の仲間と認識できる集団だけではない大きな社会の中で生きようになるにつれて、弱く見える者や見劣りする者、役に立たないとみなされる者が、軽んじられるようになってきたのです。自分の仲間と思わなければ、子どもたちは後回しにされたり、邪魔者扱いされるようになりました。怪我人や病人、年老いた者らも、仲間の一人と認識されなければ、単に足手まといな存在と見られるようになりました。そのような問題は、近現代になって初めて起きてきたわけではありません。古代世界で、すでに大きな問題として認識されていたのです。

主イエスと弟子たちの活動は、確かに、そのような問題に対する一つの明確な答えを示そうとするものであったのに違いありません。弟子たちの教会は、当時のローマ社会の中で、主イエスが示されたこの問題に対する答えを具体的に実践することで、人々に知られるようになり、受け入れられ、そして社会全体を変えていくような大きな営みになっていったのです。

社会全体が変化してきた後の現代の教会は、もちろん、古代教会と同じではありません。そうだとすると、教会のあり方の本質が、主イエスの教えや使徒たちの証しから離れてよいわけではないでしょう。

弟子たちは、**だれがいちばん偉いかと議論し合**いました。愚かで幼稚な争いだ、と言えるでしょうか。現代人であるわたしたちこそ、どの時代の人間よりもはっきりと、自分が一番大事、自分が大事にしていることが一番、という価値観を植え付けられているのではないのでしょうか。

主イエスは、子どもを抱き上げて言われます、「わたしの名のために、受け入れなさい」と。弟子たちに従わない者の話を聞き、言われます、「わたしの名を使う者を、やめさせてはいけない」と。

パウロは、キリストの名のゆえに、教会のあり方を「体」にたとえて教えました。なぜなら、「一つの霊によって、わたしたちは…皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらった」(Ⅰコリ 12:13)からです。神からの霊、キリストの名による霊を、皆、授けられているのです。神は、その霊を、すべての者に授けようとご計画なのです。一つひとつの部分は、異なっていて当然です。しかし、異なる者同士だからこそ、互いに尊び、配慮し合い、苦しみも喜びも共にする一つの体の中に留まり続けるのです。